

没落と再生

現代左翼運動の病相

西 田 弘 和

△はじめに▽

一般的には今日の左翼理論戦線において原理上の各論は、理論家と総称される人々の手によって緻密化、精巧化が企てられています。それは組織論においても同様であり、ブルジョアジーの組織論は言うに及ばず、レーニン主義の組織論、連合主義組織論等、そのほとんどのモデル形態が既に出揃っています。

しかし、それら多種多様な組織モデルの優劣は、未だその本質において決着しているとはいえません。又、他の各論との連関も、あいまいなものにすぎません。それはちょうど、ブルジョア学が細分化、多岐化していくのに対応しています。また、現実に近いことを述べる場合、他の各論に比して組織論を展開する傾向が強かったといえます。

なぜかかる傾向が強かったのかといえは、それは「原理論」偏重の傾向（結果的に）によるのではないかと思われます。たとえば、現象学的還元や認識論的切断といった手法は解明を第一義とする学的範疇において、それぞれ必要十分条件を満たすとしても、一方、変革を第一義とする左翼理論においては、必要条件である

と仮定しても、なお十分条件たりえません。これは組織論上の諸イデオロギー闘争も世界観をめぐる闘争たりえなかったことを意味しています。いかに壮麗な観念も現実性をもたなければ何もないのと同じなのですから。

本稿では原理論を展開する前段階的問題を主に述べていきたいと思ひます。

今日の左翼の運動を一つの惡しき傾向が支配しています。即ち、前衛主義とそれに結果する「組織いじり」の第一義化ということです。「組織いじり」を運動の主要環、もっと極端な場合にはそれをすべてであるかのようににはきちがえている人達が左翼潮流の多数を占めているのが現状です。今日の体制内化した労組、農協、主婦連等、組織構成員、社共や彼らに「期待」し、彼らを支持する人達、党派を構成している人達はほとんどがそうですし、ノンセクト、アナーキストを称する人達の間でさえこの傾向は支配的です。もちろんその権化はブルジョアジーであるわけですが、企業家、官僚、ブルジョア政治家達の主要な仕事は「組織いじり」

であるといつても過言ではないでしょう。

さて、現在地球上に住む三十億余の人々は何らかの危機意識を抱いています。その危機意識が世界自体の破滅の危機へと直接連なり得るところに現代が旧時代と区別される主要な特徴の一つが存在します。

ところが、人々はこの危機意識を隠蔽することにその力を注ぎ、自らの力への諸念をもつて職業政治家、官僚、ブルジョアジーにその運命をあずけてしまつています。

十九世紀において、ひとにぎりの前衛がその能力のかぎりを経て理解した世界性を、二十世紀の今日、無数の人間が皮膚感覚として了解しているのです。従つて、かつてひとにぎりの人々が果たした予言者としての役割はすでにその必要性を失つています。膨大な量にのぼる評論や主張は、人々にとってはそのほとんどがすでに自明のことです。極端にいえば、教科書を読むのも、漫画を読むのもたいして変わりないということです。

悪しき前衛主義は、民衆の無知、無能を前提にして成立します。ブルジョアジー、官僚といったたぐいの人達はその意味で真の前衛主義者であるといえましょう。

アナキストといい、マルクス主義者といい、その名辞を自己に冠することが、決して他の多くの民衆よりも何ものかをより多く知つていて、より有能であるということにはなりません。民衆と自己を区別するアナキストもマルクス主義者も、民衆にしてみれば教訓を垂れる偽善家と同じで全く迷惑な話です。

問題は、革命主体が単なる政権交代をのぞむのか、革命をこそそのぞむのかということであり、又、官僚を志向するのが民衆とし

て自己を全うすることを意志するのかということなのです。

大杉はロシア革命に際して、もし自分が現場にいればクロンシュタットを弾圧したかもしれないという感想とともに、なぜ革命家達は、革命が成功したら靴屋にでもならないのか、と述べました。前者は官僚の思考であり、後者は民衆の思考です。大杉の述べたこの整序されてはいないがしかし本質的な二つの決して交又することのない感想に上記の問題は尽きているでしょう。

「組織いじり」の根は自己を民衆と区別するところの前衛主義に起因します。七〇年以降顕著になつた「組織いじり」にのみ依拠した諸方針は、あくまで自己の維持、もしくは延命の為のものでしかありませんでした。運動方針を「組織いじり」に依拠すると、主体的力量の脆弱性が暴露されます。

こうしたバカげた「方針」は徒勞を結果するか、もつと悪い場合は、民衆の叛乱への障害物になります。恐らく、何もやらない方がかかる「方針」を実践する以上に無害である分だけよいとさえいえます。組織づくりをしてから運動だ、といった運動の彼岸化が辿る顛末は、今日の党派闘争の矮小性を見ればあまりにも明らかかなことです。バカげた方針ほどさまざまな理由づけを必要としますし、また実際になされるものです。だがそれらの理由づけにかぎつて無内容であり、当人は真剣なのでしょうが、きわめて滑稽なものでもあります。

組織は単なる一般性としては決して存在しません。それはあくまですべての状況での運動のもつ水準の物質化されたものであり、限定された一場面として定立するものです。その水準に見合わない場合、その組織は淘汰されますし、淘汰されない場合はその運

動そのものが没落します。ですから、それは全く任意に選択されるべきものではありません。従って組織について述べることは運動組織について述べることでありと理解されます。

△管理性と組織▽

六八年～六九年全国学園闘争以降の学生運動の性格を端的に表わしているスローガンに、管理支配体制解体なるものがあります。それは六八年～六九年の全共闘なる組織実体と不可分離的なものとして提出されました。

これは、六〇年代学生運動の主要勢力であった新左翼諸党派の産学協同政策・路線粉砕等といった改良型スローガンをその実体性においてのりこえ、個別学園という特殊性をそれ自体として確定し、まさにその故に、学生叛乱を世界性へと切り込んでゆく途を拓いたのです。

しかし、古いイデオロギーは、本質的にはこれを理解しませんでした。レーニン主義者もアナキストも、また当然にも杜共も、多くの人々がこれについて語りました。しかし、それらの多くは、古いものさしにあわせた思い込みしかすぎませんでした。アナ系だけを例にとっても、それは明らかです。

六八年のフランス五月革命の評価を別とすると、全共闘運動に至る実力闘争の端緒を切り拓いた六六年ベトナム反戦直接行動委員会の対「日特金」闘争と、六八年蓮台寺晋「学生運動試験」の提起だけが、六八年～六九年全国学園闘争を認識する視角だったように思われます。またアナ系の場合、全共闘の組織形態に力点を置いて評価する傾向が強かったように思われます。そのために

全共闘運動が敗北した時に、本質的には無縁な存在にすぎず、運動の風化に何ら意味をもちえなかったのだと思います。管理支配体制と全共闘的組織実体性との連関は、全国学園闘争以降もねばり強く活動をつづけた一部ノンセクトの諸君によって確定されました。組織が運動の水準の物質化である以上、運動方針の内容は組織実体を規定するのです。

全共闘運動以来今日に至るまでの学園闘争は、その一面において、政策闘争主義的（学園ではその本質において改良主義的）な諸党派と、管理支配体制解体を主張するノンセクト学生大衆とのイデオロギー闘争、運動のせりあいの過程でもあったといえます。

全国全共闘結成をその公然的端緒として、新左翼諸党派の管理支配体制論の骨抜き化を目論むイデオロギー攻勢は、運動の後退という客観的条件とあいまって、戦線内に多大な混乱を引き起こしました。そして、学園闘争の活動水準は下落しました。叛乱大衆たる学生大衆の間に政治的アバシーが強まり、ごく一部をのぞいて、多くの学生大衆の戦線はサークル化か解体を余儀なくされてゆきました。なぜなら党派には任意の闘争課題の設定が可能であるが、学生大衆が自らを主張する限り、任意な闘争などあるわけはないし、選択の任意性など存在しないのです。全く任意な選択に基づく革命・叛乱といったものは存在しません。任意の課題によって組織を維持しえたとしても、その内実においては、決して風化をまぬがれることは出来ないでしょう。その意味で、全共闘大衆が運動の後退にあたって各個に孤立せざるを得なかったのはむしろ当然であったと思っています。これに全面肯定を与え

られるとは思いますが、少なくとも、風化を風化として認識せずに「革命的」空語をまき散らしている部分よりは、如何程かまともだと思えます。多くの「革命的」空語の裏側で、運動は風化し、右翼的に再編されて来ました。

しかしこの過程も、いまや一定の決着をむかえつつあります。なぜなら、今日多くの学園においては、前衛を称する諸党派が自治会、文連等の当局による公認組織を基盤として学生管理の一翼を担い、学生大衆への公然たる敵対勢力として抬頭しているからです。

新左翼諸党派も、学園において闘争を行なわないわけではありません。しかし、それはあくまで党派政治のレベルでのみ遂行されるのであり、彼らは金脈、人脈、拠点としての学園を決つて放棄しません。ですから、彼らの学園における闘争はその初めから、運動の水準と終局がすでに規定されています。彼らは彼ら以外の部分、とりわけ叛乱大衆の運動を彼らの管理性の及ぶ限りにおいて許容します。しかし、叛乱大衆が一步これから踏み出すと、党派はその物理力を含めたあらゆる手段をもって抑制にかかるのです。

本質的には六八年〜六九年において日共Ⅱ民青の果したと同じ役割を諸党派は今日担っているのです（学園闘争が個別改良闘争としてのみ存在することを公然と主張している民青と革マルにおいてこれは最も顕著ですが、他党派も改良の水準を出ないも多少少なからざる傾向を有しているのです）。かかる党派の反動化は、これが単なる党派を担っている主体の倫理的問題にのみ依拠しているのではないことに問題の本質はあります（倫理と自覚

をその理論的骨子とする革マルが現実には最も道義性に劣ることこそが問題の対象とされなければなりません。

今のような左翼の全般的退潮の中で、なおかつ党派活動家であるような部分が不誠実であるわけがありません。彼らは真面目だからこそ泥沼化した中で展望がよく見えずとも活動しているのです（徒勞であることと、真面目であることは問題が違います）。その意味では、日共Ⅱ民青の諸君でさえ誠実なはずです。少なくとも誠実であることを自分では信じているはずです（自分だけが人間としての誠実さを有しているのだと思ひ込むと、どこかの党派のように、自党派以外の人間を種々の昆虫になぞらえてテロやリンチで殺して当然といった馬鹿げた「論理」がばつこすることになるのです）。

その結果、すぐれた活動家が数多く殺されたり、不具となって戦線を去ってゆきました。それは全く惜しむべきことです。このようなことを書くと、現実に党派闘争を行なっている人たちは、党派の政治がおまえらに分かるかと言うかもしれないませんが、そんな政治なら分からなくて結構、活動家がつぶれて、すぐれた運動などできるはずがないといっておきたい。

現在諸党派は、さまざまな諸課題をめぐって離合集散をくり返していますが、それは単なる形而下的な党派政治の力学問題にすぎず、彼らの主張する党建設など日程にものぼりません。これらの思考は、自党派の組織的維持、延命が第一義に措定されるということによります。そこでは、徒党を組む党派の方が孤立するところがあることを甘受する大衆よりも弱いのです。確かに孤立してしまつた叛乱大衆は弱いものです。しかし、それでもなおか

つ徒党を組んで延命に四苦八苦する党派主体の方が弱いのです。これが、今日の「前衛」なるものの姿です（これは、組織いじりに展望を見出そうとするアナ系やノンセクトの諸君もこれと同じ「前衛」にすぎません）。

△組織の国家性▽

国家性とは、管理性の最高形態であり、いわゆる組織とは管理実体です。その意味では国家性は組織性の最高形態であるとも言えると思います（この一般規定は、党派組織、大衆組織という特殊限定された実体においても同様に考えられます）。今日の打倒されるべき対象としての国家性が、純客体物として存在しない以上、それは私たちの主体的条件性にはね返らざるを得ません。

この段階ではじめて集権制なのか連合制なのかといった古くからの組織原則上の問題が課題化されるのです。だから、かかる対立を単なる組織原則上の形式的差異としてのみ扱い、一切をそこに限定させ、また帰着させる見解は実践上の問題において、何の役割りも果たし得ないのです。

今日のブルジョアジーの組織原則とは、彼らの大衆管理支配のために適用されます。今日の新左翼諸党派の構成とは、このブルジョアジーの組織原則の「左翼的」実現形態です。トロツキも述べる如く「手段こそが目的を規定する」のです。ですから、党派の物理性を基礎づける「革命」組織論が規定する過渡期社会はその内実において、ブルジョア社会からそう遠くない射程をしか規定づけないのです。たとえば、遠い未来の千年王国を語ろうと、それはその不確定性において、ブルジョア未来学とさほど分かた

ところをもたないのです。

今日のブルジョア組織——社会構成体といってもかまわないのですが——は、現存の秩序を基盤とします。しかし固定された場面を意味しません。それは運動する社会の総過程の一段階に位置します。ですから、今日の左翼において課題化される組織上の問題は、運動の実体性として機能する管理性をめぐるものに他ならないのです。

今日までの左翼潮流に存在した組織原則上の主要な構図に「党—大衆」なるものがあります。しかも、この構図が人々の口にのぼる時、その多くが党に比重を置いていたことを忘れてはなりません。かかる論議が出て来る根拠についてさまざまな理由づけがなされていますが、簡単に言えば、楽だからだろうと思います。党がなかったから負けたと総括すれば総括はそれで終わりですし、党をつくればなんとかなるといえば、一応方針の形式は整います（これは、無党派の集団であろうと、かかる問題設定をする限りでは同じですし、党を一般的な組織に置きかえた場合も問題としては同質です）。断わっておきますが、組織も党も別に否定しているわけではありません。必要ならば、それは作られて当然です。しかし、一般性に否定や肯定を与えても、それはそれ以上の意味をもちません。

運動が混迷を深める程、前衛党神話は努力を得ます。それは、総括の不徹底さと、方針の夢想性を隠蔽するために必要とされ、運動の混迷に一層の拍車をかけるのです。

この多大な影響力を有する新左翼諸党派が主張する真の前衛党なるものは如何なるものでしょう。それはこれまで統一戦線綱領

の、あるいは軍事の、等、さまざまな形容詞を冠されて多様なイメージで語られてきましたが、実体的に言えば、革命家集団、もつと具体的には政治家＋官僚＋軍人の集団にほかなりません。そして、それは具体的な政権担当能力をもつ集団のことを指します。ですが、新左翼諸党派がかかる真の前衛党たらんと欲しても実際には、現実的な政権担当能力を持っていないことは明白なのです（せいぜい学園に於ける代行的管理能力があるといえるにすぎません）。

今日の日本においては現実的な政権担当能力を有する左翼政党は存在しません。唯一の前衛党を自称する日共も、ブルジョア政治の枠内ではどうにかできるかもしれませんが、「左翼的」な意味での政権担当能力はないといえるでしょう。なぜなら、今日の国政レベルでの具体的実務能力者としての官僚に変わるべき官僚層を彼ら自身保有していないし、たとえ保有していたとしても現在の官僚層を駆逐する能力を持たないからです。ですからたとえ彼らが議会内において多数を占めたとしても（今日の議会はそのタテマエとはほど遠く、たいした権限をもちあわせていません。一般に言われるように行政権は立法権より優位です）、今日の膨大化した実務はパワーエリートの一 corner を占める官僚によって代行されます。即ち、「左翼」政党は民衆の「権力」を代行しますが、そこにおける実務は官僚層が代行するのです。前衛党神話を信じる諸君から言わせれば、かかる政権担当能力を保有しない「革命」組織は、過渡期の実体的構成体たりえないはずで

す。ここで問題は再び振り出しに戻ります。強大な支配機構とその実体的運営主体としての膨大な官僚層をかかえる中共やソ連等の

「社会主義圏」の指導者達は、今日、我が国に対しては自民党政府、ブルジョアジー、官僚、及び「左翼」政党の官僚といった今日のパワーエリート集団をその交渉相手とします。それは、中共やソ連の政権担当集団が我が国の政権担当集団をこそ必要としていることを示します。それは、国際主義とは程遠い世界主義以外の何ものでもありません。

新左翼諸派の路線と、スターリニズム、修正主義を同一視するなという見解が出るでしょう。ですが、かかる現象はスターリニズムを一般的に規定するところの一国社会主義や二段階革命論からのみくるものでしょうか。それは意外にも過渡期の政権を前衛党が担当するという前衛党論と、それを導き出す革命論自体の問題としてあるのです。ですから党を一国的規模から世界規模に拡張した世界党といった構想によつても克服されるべきものでもありません（労働者協会を党的なものともみなすのか、文字どおりに読みとるのかという見解の相違もここに生まれます）。

このような見解上の相違は、民衆の「政権」担当能力——厳密には社会の運営能力——をどう評価するかにかかっています。

一つは、前衛党を基礎づける民衆にはその能力が存在しないという見解であり、いま一つはクロボトキン主義に代表される何もしないでも十分であるという見解です。

この二つは水かけ論で決着が付きません。その争点は階級形成の問題にあります。しかし前者はその論理的骨子である階級理論がマルクスの体系の中で最も展開されていない理論上の最大の欠陥であることと、クロボトキンにはかかる問題設定が理解しえなかったという理由により、両者とも理論的にみても不十分性をま

ぬかれえません。

前者においては、未だ十分な階級形成がなされていないという認識を前提に党の代行が正当化されるわけであり、形成自体はむしろ彼岸化されてきたことよって結果的には民衆の「政治的能力」の欠如のみ規定づけることになるのです。たとえば階級形成を単なる認識上の問題ととりちがえると、一に教育、二に教育といったスターリンの教育政策のように単なるカードルの形成にのみ終るのです。しかし、ゴドウィン教育論の流れを汲む大沢正道の、今日では教育水準があがったので民衆は社会の運営能力を有するといった折衷的な見解としても存在しません。今日では中間層に革命全体が構造的な移行をとげたとみなす革命主体移行論も同様です。

古典的な反前衛党観を有する人達にはその図式主義を排すべきだぞといいたいし、前衛党神話を信じる人々には大衆運動が党派の「手助け」なしに自己形成しうる可能性が存することを述べておきたい。

かかる志向を現在の党派諸君や今日の理論家達が阻害しているのが現実だと思えます。ノンセクトの中にはかかる問題性を的確に把握している部分も存在します。彼らはすでに旧来の一切の枠組みから離れたところで自己形成をはじめているのです。

叛乱する大衆のエネルギーを党派や官僚が管理する。そしてそこで組織されたエネルギーは支配階級の管理性のうちに整然ととり込まれ、また、次なる叛乱に対する緩衝材として支配の道具と化するのです。今日の党派、労組等が果していることは、この役割に他ならないのです。党派は自らの組織が危機に陥ちこめば、延

命のために支配層の常として大衆をもテロルのです。私達はこれについての例を数多く見てきました。かかる「左翼」党派の狂乱は大衆運動が自己を実現するまで続くのです。

△組織代行と運動代行▽

では大衆運動とはなんでしょう。私はべ反委の闘争にその一つの典型が見られると思います。

大衆運動とは、決してその量の多少によつて規定されるべきものとは思っていません。量の拡大が質的な飛躍をもたらすといったエンゲルスやスターリンの弁証関係で、大衆運動を規定したとしても、それは、一般的概説にとどまるにすぎません。またかかる量的規定を強調する部分が、運動を疎外し、風化させてきた例が数多くあります。

人数は多いにこそませんが、たとえひとにぎりの部分であろうとも、自ら大衆として闘うとき、それは大衆運動のすべての条件を満たしているのだと思います。その意味で、クロボトキン主義や、その純正アナキズムの民衆に対する一般規定など、大衆運動とは無縁な理論です。なぜなら一般性としての民衆や大衆は、決して実在しません。ですからそのみをとあげて、いくら苦心して概念操作をしようと、それはそのワクをこえでるチャンスをもちません。

組織概念上で、とりわけロシア革命以降顕在化した問題に代行主義の問題があります。それは、大衆組織（ソヴィエトや労組等）に対し、党・官僚集団が敵対的勢力として登場し、その後の「革命」過程が、主に党史として記されて来たことへの批判の結果と

いえましよう（党が敵対的勢力として抬頭するにあたっては、当然にも対外的・対内的運動過程自体が強い関連性を有するわけですが、ここでは課題外なのでふれない）。しかしながら、それは主に組織代行上の問題という形式性に比重が置かれて述べられて来たのではないかと思います。それは本質総体を述べてはいません。

組織形態上の問題に限定づけえるならば、第一インターで組織原則上の論争があれば程にたたかわされる必要性もありません（いま一つの主要な争点が相続権問題にあったことに留意）。それが革命論総体と不可分であるが故に、ある程度の比重を占めるに至ったのです——社会民主同盟の解散問題等に関しては、組織間抗争（バックニン派とマルクス派）としての、いわば官僚集団間抗争と同様の問題であり、組織戦術上の抗争であり、上記と一定区別される——。組織的代行は、運動上の代行を結果するが故に反革命なのであり、運動的代行は、組織的代行を必然化するが故に人間の解放闘争への敵対的矛盾としてたちあらわれるのです。

代行主義とは、今日のブルジョア社会の現実態であり、「左翼」代行主義とは、政治的意味内容に於けるその「左翼」的完成形態です。代行主義は、人類史を階級闘争の場として必然化して来た運動の総過程に物質的基礎を与えて来た政治的構成体の意味内容だと思っています。

今日、左翼反対派等が評価されていますが——その評価は当然といえる——それとともに、大筋に於いては、組織上の反対派として結果したこと、即ち、官僚集団間抗争として実現したこと、も指摘されておかねばならないでしょう。党が現実のものである

以上かかる場面は必然化されましようが、それはあくまで運動の限定された一場面を構成すべきです。それが最大限綱領から最小限綱領に至る綱領的過程のすべてを具現化するわけではないのですから。

今日かかる問題が端的に表われるのはゲバルトにおいてでしょう。そこでは、現実性をもたない理由づけや、カッコよさといった粉飾は一切とりはらわれます。党派諸君の発想によると、正規戦及び組織戦以外にゲバルトは存在しないかの様に錯覚します。この発想が大衆運動にもち込まれると大衆運動内部において、軍事の代行が生起します。ありていにいって、いわゆる正規戦（主に内ゲバにおいて）を組みえる部分は、全国党派にしか存在しないでしょう。

六九年を境として顕著となつた軍事党構想なるものはかかる発想に依拠したものでした。しかし、それは軍事の代行主義です。それは今日のブルジョア国家の代行的軍事としての軍隊、警察力と組織戦（代行的軍事）をもつてのみ戦うべきだとする堅い考えから生まれます。大衆叛乱——大衆的軍事とはかかるものを意味しません。軍隊や党派軍団といった組織を支えるものは支配のための管理です。管理のないところに軍隊のような組織は成立しません。反管理の従たる民衆がブルジョアジーや党派の軍事をまねても彼らの軍隊には必ず負けます。しかし、また、その故に民衆は軍隊や党派軍団型のゲバルト力をもたないからといって悲観することはありません。代行と管理に依拠した組織戦を行う必要は必ずしもないのですから。

私達は学園の代行権力として機能する党派の全国動員された完

全武装の正規部隊を数千の素手の学生たちが一挙的に粉砕した例を知っています。膨大なエネルギーをもつ叛乱大衆の前では組織されたゲバルト力も何の役目も果しえなかったわけです。また、組織戦に限定せず、彼らの管理能力を叛乱大衆のゲバルト力が凌駕したとき、彼らの管理能力は壊滅し、恐慌をきたすにちがありません。

支配者はそのことをよく認識しているが故に管理を十分なうえにも更に徹底させるのです。しかし、管理が徹底すればするほど人間は自己の総体性を剥奪されるが故にその奪還を期して叛乱大衆へと自己を形づくつてゆくののです。歴史の本源の動力としての叛乱は、まさにかかる蓄積過程を経て、一切の代行と管理を解体しつつ自己を実現するのです。

△おわりに▽

日本の左翼の没落は始まりました。しかしなお、さらに左翼は「左翼」たるべく没落しつづけねばなりません。今日の左翼は総じてこれを回避することはできないでしょうし、かかる負担を転化する途もこれ以外にはないでしょう。

漸くの間に、新左翼のいくつかの党派はつぶれるか衰退し、政治的アパシーが支配的傾向となり、六〇年安保以来、えいえいと営なまれてきた新左翼の運動は壊滅的打撃をこうむるでしょう。ある者はこれを「冬の時代」と呼び、ある者は六〇年安保直後の状況に例え、またある者はいまこそ自分達の勢力を拡大すべきチャンスである、と考えるかもしれません。しかし、このような認識は何ものをも生み出しません。

今日まで主として啓蒙者、官僚、職業革命家の集団として自らの力を蓄積してきた新左翼は今やその構成の故に、大衆叛乱への負債を支払うために没落しなければなりません。議会主義へのめり込みを「革命的議会主義」なる名辞で隠蔽する諸君、他の勢力の衰退に乗じて火事場泥棒よろしく自己集団の利益のために血道をあげる諸君は自ら墓穴を掘っているのです。

この際とくにアナキストを称する人達にいつておきたいのは、左翼の没落はまたアナキストの没落でもある、ということです。アナキストがひとり没落をまぬがれると思うのはおめでたいといふものです。アナダ、ボルダ、などという観念上の思い込みなど今日の状況ではどんな値打ちもありません。自称、他称のマルクス主義者、アナキストはいうに及ばず全ての左翼活動家は今までの運動の決済を迫られているといふべきです。

ナロードニキはかつて各個に没落してゆきました。しかし、今日の日本では総体としての没落が強いられているのです。

左翼運動はだからこそ自ら望んで没落すべきです。そして没落しぬいたときにこそ左翼運動は自己を大衆叛乱として実現するのです。この大衆叛乱こそが革命という言葉の前で逡巡する今日の不毛な運動の円環をきっぱりと断ち切り、真の革命を我々の前に可視化するのです。

×

×

×